

平成 20 年度海外研修派遣報告書

名古屋大学医学部附属病院 西本 卓矢

1) 参加した目的とその成果

今回私は、Stanford 大学における最先端技術や施設環境について学び、本施設の臨床業務や自身の研究に応用することを目的とし、本研修に参加した。講義内容は多岐にわたり充実し、中でも MRI 撮影技術として超高磁場による fMRI, DTI など Neuro 領域における貢献度や期待度の高さを十分理解する事ができた。他にも Sodium Images of the Spine や Tractography のカラーマップの表現法が印象に残る。また、今回の研修の目的でもあった Molecular Imaging の講義において、細胞分子レベルでの画像診断が次世代の医療において欠かすことのできない領域になると感じる事ができ、非常に有意義であった。

私は現在、C-arm Cone Beam CT の画質評価を中心に研究を行っており、同分野の講義を当初より期待していた。IVR 支援システムとしての重要性や Cardiac Imaging with ECG gating の有効性について学び、今後の研究において参考になった。更に Future View として Standing Position での Cone Beam CT 撮影の実現に向けて研究が進んでおり、特に整形領域において画期的な撮影になることが期待される。今後の動向に注目していきたい。

2) 日本と米国の放射線技師制度の違い

以前の報告書より、米国では職務の分業・細分化が進んでおり、マニュアル以上の仕事に手を出さないことは習知していた。しかし実際の施設見学の 3D ラボにおいて、計測ポイントや測定方法など細部にわたり医師の指示があることに驚き、個人の経験や知識が臨床に反映されず、物足りなさを改めて感じた。

また、免許制度のあり方にも相違があり、米国はモダリティー毎に専門資格が必要で、日本のように多分野での業務は不可能であった。両国の制度に一長一短はあるが、日本においては、技師質の向上のため専門資格や免許更新制度導入の必要性を感じた。

3) 今回の研修で得たことの今後への生かし方

研修を通じて感じた事は、講師陣が明確な “Future Vision” を持って研究に挑んでいる事であった。2, 3 年後から 5 年、10 年後今まで絶えず変化する医療環境を見据え、求められる成果を常に考える “Future Vision” の必要性を感じた。今後は診療放射線技師として自分の中で “ 未来 ” というものに拘り、日常業務や研究に挑みたい。

また今回、日本人に欠けている自己主張の必要性を強く感じた。しかし、我々の ‘ 和を重んじ、努力を美とする ’ 国民性は、多部門で協力しながら切磋琢磨を可能とし、この姿勢は世界に対して決して劣ってはおらず、日本の技師の熱意とレベルの高さを実感することができた。そして、本研修での最大の収穫はこのような高いモチベーションを持つ仲間に出会えたことである。今回培われた絆を今後とも大切にしていきたいと思う。

最後に、このような機会を与えていただいた日本放射線技術学会の学術交流委員会の皆様、並びに多大なるご支援をいただいた GEYMS 関係者の皆様に深く感謝申し上げる。また、参加に際して快く送り出していただいた名古屋大学医学部附属病院診療放射線技師諸兄に感謝する。

お気に入りの写真
3D Lab での筆者(左)と Marc Sofilos, RT(右)

